

信長・家康時代の始まり

戦国の流れを変えた古戦場 長篠・設楽原

長篠合戦図

「設楽原歴史資料館」に展示



地元の東郷東小学校の6年生が、卒業記念に美術の中山先生の指導により描いた。原画は、犬山城白帝文庫の「長篠合戦図屏風」

コロナ下の研修旅行 人数も控えめにしました！

市川会長 挨拶

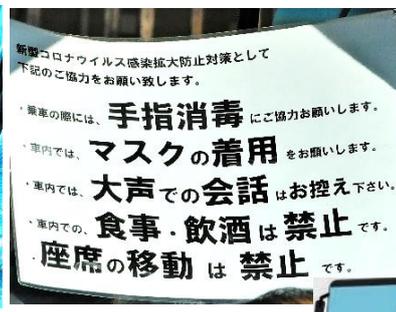
8:42



ワクチン接種チェック



車内で許されたのはこの1本のみ



車内にはられた注意事項



長篠設楽原P 休憩



新東名高速道路。新城ICでおりて目的地へ。

設楽原歴史資料館 到着

ボランティアガイドのお出迎え

10:01



外壁等の改修工事中



設楽原ボランティアガイドの会の方々 0536-22-0673

長篠の戦い

天正3年5月21日(1575年6月29日)長篠城をめぐり、38,000人の織田信長・徳川家康連合軍と、15,000人の武田勝頼の軍勢が戦った合戦。決戦地が設楽原だったため、長篠・設楽原の戦いともいわれる。

▶開戦に至る経緯

甲斐の武田氏は駿河の今川氏を併合し、遠江・三河へ侵攻する。また、尾張の織田信長は將軍足利義昭を擁して上洛する。その後、義昭の反信長勢力を糾合しての挙兵に武田信玄も加わり、徳川家康の三河へ侵攻する。しかし、信玄の急死によって西上作戦は頓挫する。

天正元年、徳川方から武田方に転じ、武田信玄の死により徳川方へ再属した奥三河の奥平貞昌(信昌)は、家康から長篠城主に配される。

天正3年、武田氏の後継者勝頼は、遠江・三河を再掌握すべく大軍で三河へ侵攻し、5月には長篠城を包囲する。これにより、長篠・設楽原における武田軍と織田・徳川連合軍の衝突に至る。当初、武田軍は岡崎城を目指したが、内通者の発覚などにより長篠方面に向きを変えたと思われる。

▶合戦の経緯(『信長公記』等による)

武田軍15,000人の大軍に対して長篠城の守備隊は500人の寡兵。数日以内に落城必至の状況下、家臣の鳥居強右衛門(とりい・すねえもん)を密使として放ち、約65km離れた岡崎城の家康へ援軍を要請する。

岡崎城では既に信長の率いる援軍30,000人、家康の8,000人とともに長篠へ出撃する態勢であった。報告を終えた鳥居は、この朗報を一剋も早く長篠城に伝えようと引き返すが、城の目前で武田軍に捕らえられる。

鳥居は、勝頼の寝返りの誘いを承諾した振りをするが、「二、三日で数万の援軍が来る。それまで持ち堪えよ」と命令とは逆のことを叫び、磔となる。この鳥居の決死の報告により、長篠城の城兵たちは士気を奮い立たせ、援軍が到着するまでの二日間、城を守り通すことができたという。

織田・徳川軍は、長篠城手前の設楽原に着陣する。信長は30,000人の軍勢を隠し、馬防柵を設けるという当時の日本としては異例の野戦築城策をとる。これは信長がイタリア戦役を知っていた可能性がある。

一方、信長到着の報を受けた武田陣営では、信玄時代からの重鎮たちが撤退を進言するが、勝頼は決戦を行うことを決定する。

武田軍の動きを見た信長は、相手の油断を誘った面もあるが、3,000挺の鉄砲を主力とする守戦を念頭に、武田軍を誘い込む狙いであった。

5月20日深夜、信長は家康の重臣酒井忠次の献策を褒め、弓・鉄砲に優れた兵約4,000人の別働隊を組織し、酒井忠次に奇襲を命じた。別働隊は、長篠城包囲の要であった鶯ヶ巣山岩を後方より強襲して落とすことに成功した。織田・徳川連合軍は長篠城の救援という第一目的を果たした。

さらに籠城していた奥平軍を加えた酒井奇襲隊は、有海村駐留の武田軍まで掃討し、設楽原に進んだ武田本隊の退路を脅かすことになった。

5月21日早朝、設楽原では武田軍が織田・徳川軍を攻撃。戦いは昼過ぎまで約8時間続いたが、織田・徳川軍から追撃された武田軍は10,000人以上の犠牲者を出し、織田・徳川軍の勝利で合戦は終結した。

織田・徳川軍の主な武将に戦死者はいない一方、武田軍の被害は甚大で、譜代家老の内藤、山泉、馬場を始め重臣や指揮官等多数が討死した。勝頼はわずかに数百人の旗本に守られながら、信濃の高遠城に後退した。

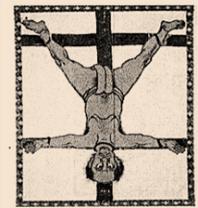
▶長篠合戦の政治的な影響

長篠における勝利、越前一向一揆平定による石山本願寺との和睦に成功した信長は、「天下人」として台頭した。徳川家康は、三河の実権を完全に握り、遠江の重要拠点である諏訪原城・二俣城を攻略して、高天神城への締め付けを強化した。

武田氏は長篠の敗退を契機に相模後北条氏、越後上杉氏との関係強化や佐竹氏との同盟、関東諸族らと外交関係を結んで再建に力を注いだ。天正10年(1582年)3月、織田・徳川連合軍による武田領国への本格的な侵攻により、武田氏は滅亡する。

長篠城主の奥平貞昌は、この戦功によって、信長から「信昌」の名を賜り、家康からも長女・亀姫を正室とした上、所有の名刀「大般若長光」を賜る。さらに重臣、知行など子々孫々に至るまで保証され、貞昌を祖とする奥平松平家は明治まで続く。

また、武田方に処刑された鳥居強右衛門は、後世まで忠臣として名を残し、その子孫は奥平松平家家中で厚遇された。



設楽原歴史資料館



まず迎えてくれた岩瀬忠震(像)とは?

岩瀬忠震…生家の旗本 設楽家は、「新城竹広」が知行地。

岩瀬肥後守 忠震公の像

忠震は江戸麻布我善坊の旗本設楽家に生れ、岩瀬家へ養子。昌平賢に学び出仕して徽典館学頭を務む。老中阿部正弘に抜擢されて目付となり、尊皇攘夷、風雲急を告げる幕末に於いて開国論を主唱し、外国奉行として米・蘭露・英・佛との安政の修好通商条約締結に盡瘁す。乾坤一擲、開国の偉業は実現するも、井伊大老に忌避されて澤東に閉門蟄居、可惜四十三才にして前途有為の一生を了えられた。今日、設楽・岩瀬両家とも継嗣なく、忠震公の偉業を立布顯彰すべく世襲代官瀧川家第三十四代滝川一興発願と寄付により、斯界の巨匠平寿翁中村晋也氏に懇望。その制作にる忠震公立像が遂に完成。郷党諸士の協力得て、設楽家の陣屋があった、この竹廣の地に建立されることとなった。忠震公と第十九代瀧川一清との水魚の交りが思ばれる

平成二十八年四月吉日
 第二代忠震会会長 滝川一興 謹言
 題字揮毫 新城市長
 制作 日本芸術院会員

像の前での入館前説明が定番

- ◆幕末の外交官・開国派(日本の開国の先駆者)・日米修好通商条約に署名。
- ◆銅像の指さす方向は、横浜の開港記念館

火おんどり



◆入館。「長篠・設楽原の戦い」「火縄銃」「火おんどり」「岩瀬忠震」のコーナーがある。

↑ チケットのデザインが違う。何種類あるんだ？

◆火おんどり … 戦いの直後から、戦死した武田軍の霊を慰めるために、長さ2-3m直径80cmほどの松明(たいまつ)を燃やして行ってきた信玄塚での供養(鎮魂の祭り)。447年続いている。



◆「長篠合戦図屏風」は、関ヶ原合戦図屏風より、一人ひとりがリアルに描かれている。

◆卒業記念で小学生が作ったこの作品は、各自が担当するセクションをベニア1枚1枚に描いて、それを合わせたものである。制作に3ヵ月間かかった。

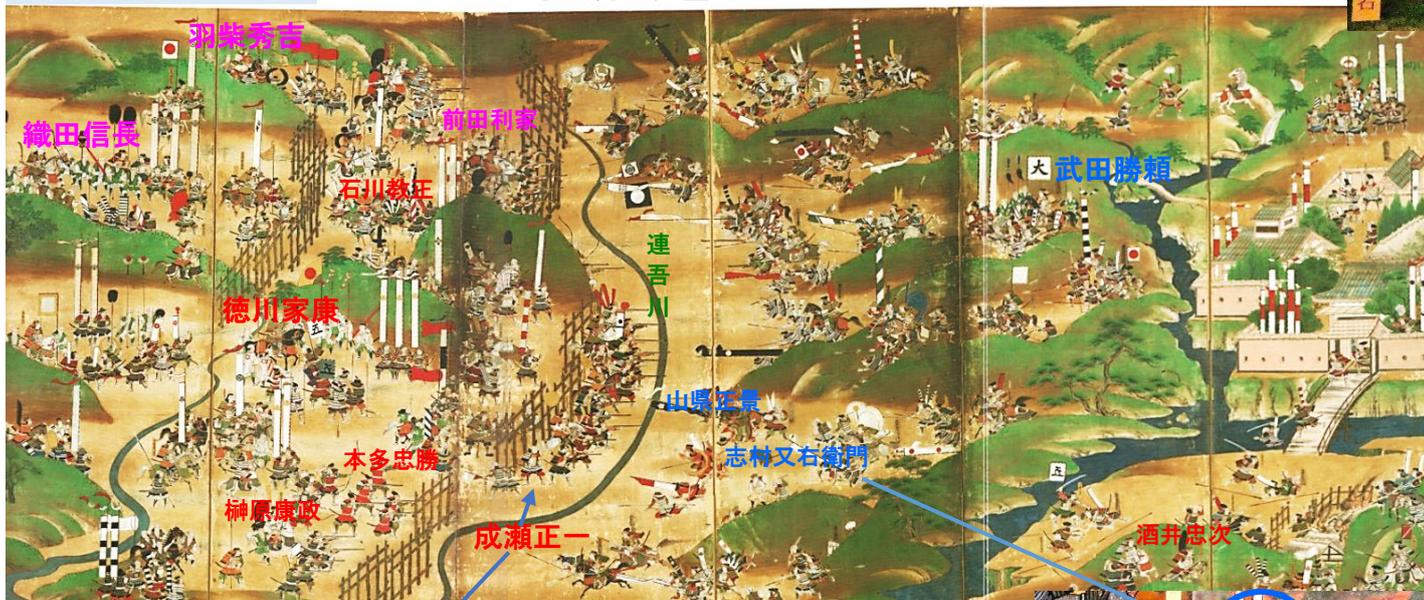
◆長篠合戦図には多くの武将が描かれている。信長・秀吉・家康の三人が同じ場面に描かれた唯一の作品。「作左」は見当たらない。



製作・平成六年度
卒業生七十八名

合戦図・気になる場面

主な人物の位置



これは誰？
絵を描いた人では、という説も



- ◆**成瀬正一** … 長篠合戦図屏風は写本が多いが、もとの図は成瀬家の作ったものである（犬山城白帝文庫所蔵）。合戦図屏風は江戸時代初期に描かれたと考えられてる。徳川本家の重臣だった成瀬家が、尾張徳川家の付家老として出された（陪臣になった）ことを不満に思い、先祖（成瀬正一）の武功をアピールしようとしたと描いたと言われている。
- ◆馬防柵の前で鉄砲を撃っている。三段撃ちではない。



- ◆**家康本陣** … 白羽織の背中に朱の星（2人）。この星印は「六芒（ろくぼう）星」で陰陽師のシンボル。彼らは天文学などから気象を監視する天気予報士。陰陽師たちは、戦闘に適した日程を天気を予報していた。
- ◆**五の旗印** … 「五」の文字は、仲間を意味する「伍」に通ずるとされる。

徳川家の使い番（エリート伝令将校）が使用したもの。「伍」または「五」の旗指物は使い番専用の指揮権委任状と通行手形を兼ねた旗。

ビックリ \(\pi\Delta\)



- ◆ボランティアガイドの合戦図の説明が終ると、“こういう説明をして頂いているとは感動した”と女性が。この合戦図を描いた卒業生。もちろん、この方の描いたピースがどこかにある。

館内には多くの貴重品が展示される



木砲

- ◆**志村又右衛門** … 銃撃によって討ち死にした山県正景の首を、家臣の志村又右衛門が自陣へ持ち帰るところ。志村又右衛門は志村けんの先祖。



- ◆**武田信康**（のぶかど）… 母衣（ほろ）= 武士の「七つ道具」の一つ。騎乗時に馬が駆けると長い布が膨らみ背面からの流れ矢を防御した。

設楽原に倒れた武人の塚（一部） 他にも多くの墓がある



火縄銃・古式銃の展示は、質・量とも日本一



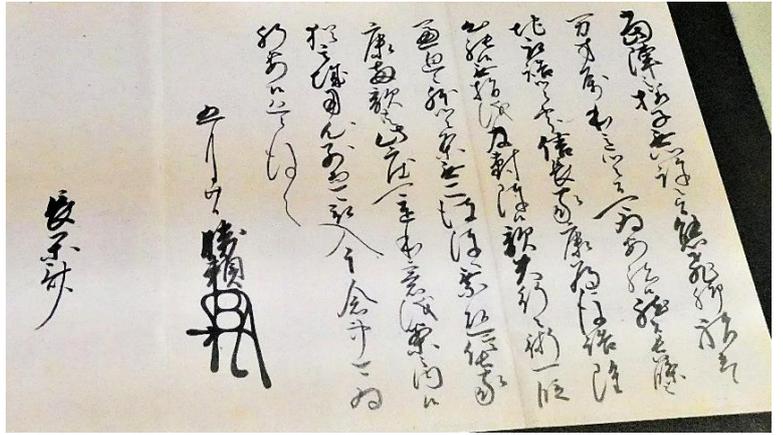
信玄砲

日本最古の火縄銃



武田勝頼 書状

決戦の前日に家臣 長閑齋に



◆戦国時代に作られた火縄銃は、現在数丁しか残されていない。私たちが見る火縄銃はほとんど江戸時代に作られたものばかり。信玄砲は、数少ない戦国時代の火縄銃が1丁。この信玄砲には、武田信玄を撃ったという伝説がある。

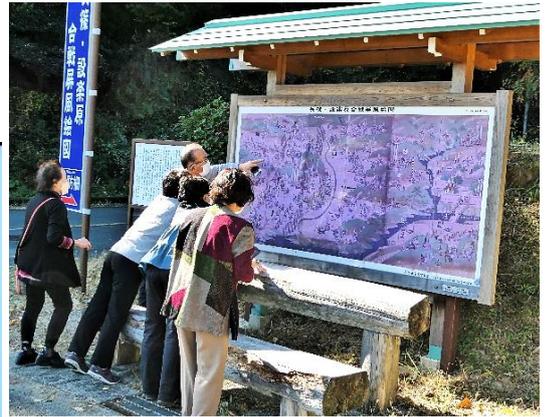
馬防柵

ここにも合戦図が！

10:50



作左を探す。 いない。



馬防柵へ



設楽原の「長篠・設楽原合戦屏風絵図」

この「長篠・設楽原合戦屏風絵図」は、犬山城白帝文庫所蔵の「長篠合戦図屏風」を基に作成された。設楽原で行われた決戦の様子を描いた「長篠合戦図屏風」の作者（絵師）はこの絵を描くために設楽原を実際に訪れていたであろうと思えるほど、しっかりとこの周辺の地形を再現している。

中央を流れる連吾川の両側には信玄台地（山県陣地・内藤陣地等）と弾正山台地（徳川陣地・織田陣地）がある。その弾正山台地は南端の家康本陣地のあたりから南は平地になっている。さらに、弾正山台地の西側には大宮川が描かれ、その上流にはかんぼう山の山並みが据えられ、そのふもとに信長や秀吉が陣地を置いている。信玄台地の南も平地で徳川方と武田の山県隊が激しい攻防を繰り返していた。連吾川上流には激戦地の一つである丸山（真田昌輝・信綱陣地付近）も描かれている。

再現の馬防柵はこの絵の中央あたりで、ちょうど織田軍と徳川軍の境に位置している。

令和三年（二〇二一年）秋 馬防柵を愛する会
令和三（二〇二二）年度 新城市地域活動交付金事業

武田軍の方を向いた地蔵が…





◆北側に新東名高速道路（高架）が見える。その200m程先が、馬防柵の北端（左端）



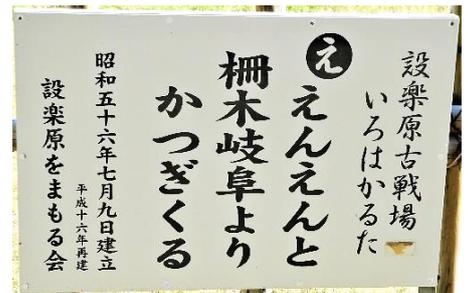
織田・徳川連合軍にとっては、勝利を呼ぶ重要な布石であり、逆に武田軍にとっては、勝利を阻む痛恨のしがらみとなったのである。

当時、天下無敵とうたわれた武田の騎馬隊をこの柵で防ぎ止め、その内側にあって鉄砲でねらい撃ちにするために造られたもので、延長二杆余に及んでいた。決戦の正面となったこの連吾川沿いに三重の柵を構え、背後の弾正山を越えた西側を流れる大宮川沿いには、さらに一重の柵を設けて万一に備えていた。

設楽原をまもる会

天正三年（一五七五）「設楽原の戦い」に用いられた馬防柵を再現したものである。連吾川に向かって右側の下手に徳川軍のものを、左側の上手に織田軍のものを、区別して構築してみた。両者の様式には、攻口（出入口）の設け方に違いが認められる。

馬防柵



◆連合軍が築いた馬防柵の丸太は、信長が岐阜から設楽原へ、兵士に一本ずつ持ち運ばせたとされている。（柵木一本と縄一把）

◆戦国時代の設楽原一带には今のように大きな木々は少なかった。それで馬防柵用の丸太を現地で調達することができなかった。東側（武田軍側）は、平地が少なく山があるように見える。騎馬隊が突撃できたのかと思えるが、近年の植林のせいで山のようにになっているが、本来は丘のようなところであるらしい。



◆火縄銃の弾は200mは飛ぶ。（資料館のところで弾が見つかった）殺傷能力は70mくらい。



名和式「鉄砲構え」
 天正三年（一五七五）新暦の七月九日、織田信長・徳川家康軍が、武田勝頼軍との設楽原決戦に備えて構築した「鉄砲構え」乾堀と馬防柵と銃眼付きの身がくし（土塁）の三段構えであった。古文獻と時代考証による復原である。
 平成五年二月
 設楽原をまもる会
 考証責任者 名和弓雄
連絡先 東京

- ◆再現された馬防柵はきれいな丸太でつくってあるが、一番奥に荒削りの当時の形のものがある。木の枝は、あえて落としていない。登るのに邪魔になる障害物。
- ◆柵の前には空堀がある。敵は一度くぼみの中に
- ◆柵を越えると土塁（堀を掘って出てきた土を盛

った）がある。土塁には火縄銃を固定できるくぼみがあり、くぼみの上に火縄銃を乗せ、敵が近づいて来たら撃つ。三段構えの防御＝堀→柵→土塁。そして、至近距離から火縄銃で攻撃。



参考写真



長篠・設楽原の戦いの流れ

歴史資料館の展示から
 1545年(天正3)5月(旧暦)

1574	2年	■信長、越前・伊勢を鎮圧	・定郡、野田城へ	■勝頼、美濃明智城を攻略	
				■勝頼、遠江高天神城を攻略(6.17)	
1575	3年		・家康、奥平貞昌を長篠城主に任命		
				■勝頼、長篠城を包囲	
				■勝頼、吉田城を攻める	
		■信長、長篠城救援に岐阜発進			
			・鳥居強右衛門、長篠城を脱出		
		■信長、家康と合流	・強右衛門、陣輪到着		
		■連合軍、牛久保城に一泊	・強右衛門、陣死		
		■連合軍、設楽原に布陣。馬防柵構築			
				■武田軍、軍進	
				■武田軍、寿川を渡り設楽原に布陣	
		■連合軍大勝 ←	設楽原の決戦	→	■勝頼、敗れる
			・村人、避難先から帰村		
				■勝頼、甲府へ帰城	
		■信長、岐阜へ凱旋			

信長の岐阜発進

武田軍が激しく長篠城を攻撃していた5月13日、織田信長は長篠城を救援するため、岐阜を出発しました。信長は出陣するにあたり、2つの準備を行っています。1つは、たくさんの鉄炮と撃ち手を用意するよう細川藤孝、筒井順慶など京にいる家臣に命令しました。もう1つは、設楽原に馬防柵をつくるために、大量の丸太と縄を用意させ、足軽に柵木1本、縄1把を持たせました。途中、熱田神宮で戦勝祈願を行い、14日夕刻には岡崎に到着し、徳川軍と合流しています。3万8千人にも上る連合軍は、16日牛久保城、17日野田城と進み、18日設楽原に到着しました。

武田軍、瀧川を渡る

設楽原に姿を現した織田・徳川連合軍の大軍を前にして、19日、武田軍は医王寺の本陣で軍議を開きました。「設楽原へ進軍すべきか、退却すべきか、このまま動くべきでないか」勝頼は進軍すべきと主張し、馬場や内藤など老将は慎重であったと言われていますが、実際にはよく分かっていません。激しい議論の末、武田軍は連合軍と戦うことを決め、一部の軍勢を長篠城や鷲ヶ巣山などに残し、19日から20日にかけて、瀧川を渡り始めました。連合軍と向き合う形で、設楽原の東の台地に布陣を終えた馬場、内藤、山県、土屋の諸将は、決戦の前夜に清井田で水杯を交わしたと伝えられています。

馬防柵と火縄銃

武田軍と織田・徳川連合軍の決戦の火ぶたが切られました。この決戦における最初の激突は、馬防柵の作られた南端で起こりました。武田方の山県昌景が率いる赤備えの騎馬武者が、押し太鼓とともに一斉に柵を襲いかかります。これに対して、徳川方の大久保隊による足軽鉄炮が火縄銃を撃ちかけます。武田軍が馬防柵に近づくと、連合軍の足軽隊は柵内に逃げ込み、入れ代わりに柵内から武田方に向かって火縄銃を放ちます。その火縄銃は武田軍が馬防柵にたどりつかせまいとするかのように次から次へと断続的に放たれました。武田軍が後退すると、足軽隊が再び柵外に出て攻撃を仕掛け、武田軍が近づくと銃弾を浴びせる・・・そんな戦いがあちこちで繰り広げられました。

馬防柵の構築

設楽原に着いた連合軍は、それ以上の進軍をやめ、連吾川の西に陣をおきました。そして、連吾川沿いのおよそ2kmにわたって、馬防柵を作りはじめました。連吾川の上流は雁峯山のふもとに続き、下流は深い谷となり、人馬が越えることは難しく、両軍が向き合った中流は、まるで沼のような水田が開け、大軍が走り抜けることのできる場所は限られていました。この川沿いに馬防柵を作ることによって、一つの大きな城を造ったと考えられます。川が堀となり、柵は堀の役割を果たしています。柵の内側には、戦いの隊形を保ったままの大部隊を置くことができ、守りながら攻めるといった戦い方を生かすことができます。連合軍はこうした柵を幾重にも作ったといわれています。

決戦の火ぶた、鷲ヶ巣山

5月21日(太陽暦7月9日)早朝、連吾川を挟んで、両軍は戦いのきっかけを待っていました。最初に朝もやを破って銃声がとどろき、かん声が上がったのは設楽原よりはるか東方の鷲ヶ巣山でした。徳川軍の酒井忠次隊が前夜、設楽原を出発し、松山峠を越え、武田軍の砦に奇襲攻撃をかけたのでした。この奇襲攻撃隊の中には野田城主の菅沼定盈や来迎松城主の設楽貞通、長篠城主の奥平信昌の父定能など、東三河の諸将が大勢いました。突然の攻撃に砦をまもる武田の守備隊の多くが討ち死にし、燃え上がる砦の火煙と銃声は設楽原での決戦に大きな影響を与えたと考えられています。

◆この奇襲作戦は、決戦の行方を左右する大きな役割を果たした。武田軍は動揺し、退路を断たれた恐怖心が、設楽原での一斉突撃につながる。

激戦、三重の柵の攻防

連吾川沿いに立ちはだかる馬防柵を前にして、武田軍は右翼の馬場隊が要となる丸山を抑え、後に続く真田隊・土屋隊が馬防柵の第一柵を突破しました。中央では、内藤隊や原隊が猛攻を繰り返していました。一方、左翼の山県、小幡隊は大久保隊の奮戦により柵を突破することができず、次第に弾正山前へと戦いの場所を移していきました。弾正山の前では、山県隊の猛攻に続いて、内藤隊が柵に迫り、第1、第2の柵を破り、20人ほどが第3の柵までも越えて、家康本陣へと突進しました。しかし、本多忠勝らによって追い返され、突破口を完全に開くことはできず、激戦の中で武田軍の将兵は次々に倒れていきました。

設楽原から甲州へ

馬防柵で守りながら、鉄砲で攻める連合軍に対し、武田軍は馬防柵に決定的な突破口を開くことができないまま、山県昌景、内藤昌豊、真田信綱といった武田軍の主力となっていた武将が次々に討死していきました。

設楽原から離れること2km。瀧川沿いの小高い所に馬場信春の碑があります。遠ざかる勝頼主従を見届けた信房が殿の務めを果たし、62歳の最期を遂げた地です。

一説には武田方は1万人を越える戦死者を出したとも伝えられ、その大半は退却戦の中で亡くなったともいわれています。

勝頼は戦地本陣から、雁峯山伝いに甲州をめざして、落ち延びていきました。途中、田峯城に入れず、その後、高坂弾正の迎えを受け、24日、甲府にもどりました。

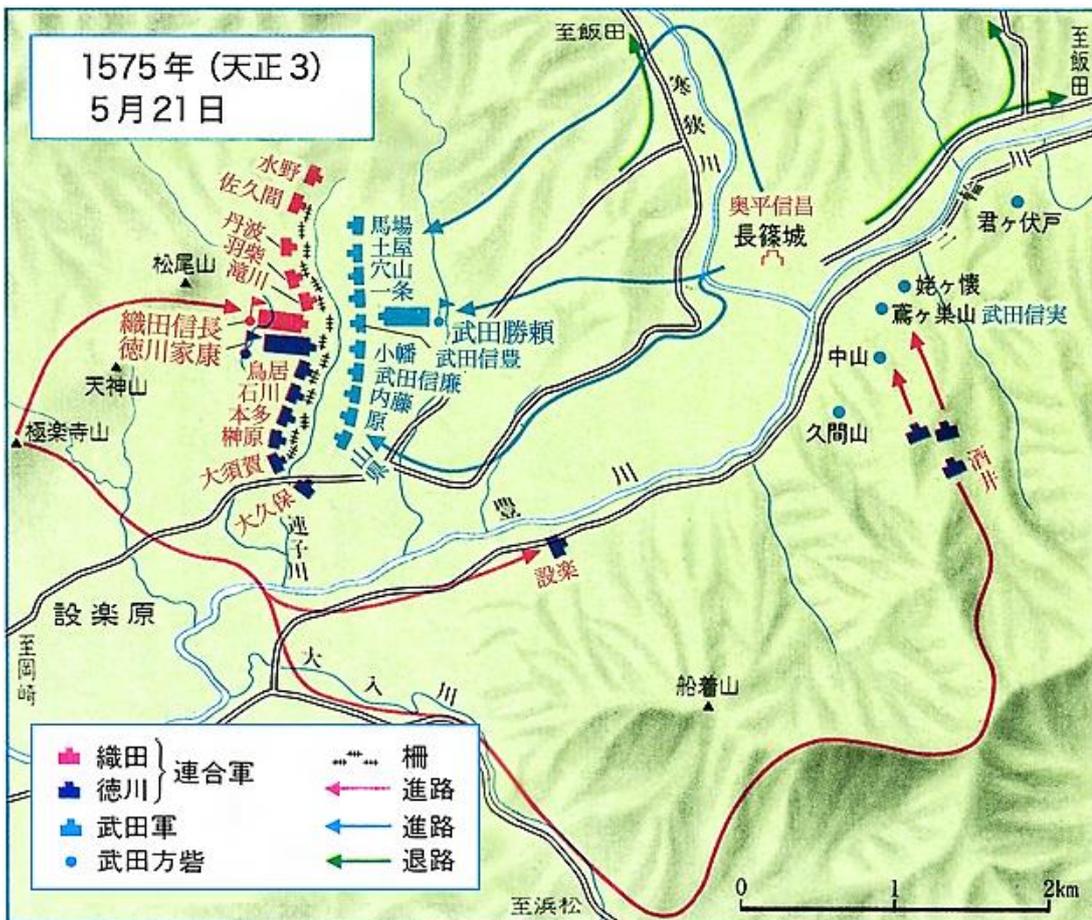
設楽原から「しんしろ」へ

武田軍を追いかける連合軍、信長と家康は深追いすることを許しませんでした。勢いだけで追撃することの難しさと、武田軍の激しい抵抗があったものと考えられています。一戦いは終わりました。

横たわる多くの屍は一か所に集められて塚となり、信長によって「信玄塚」と名付けられました。「武田の時代」の終わりを宣言し、「信長の時代」を告げる歴史の分岐点となりました。

また、長篠城を守り通した城主奥平信昌は、その功労を信長、家康から賞されました。

翌天正4年(1576)、家康の長女亀姫を迎えた信昌は、長篠城に代わる新しい城を豊川の中流に築きました。「新城-しんしろ」の始まりです。



信長本陣

11:44



極楽寺のあった山
(車窓から)

信長は、その後戦地本陣を「茶臼山=長篠設楽原PA東」に移動

日本大百科全書(ニッポニカ)

◆信長・家康連合軍は、なぜ勝てたか

- ① 長篠城の守りが固く落ちなかった。
- ② 城から離れた連吾川右岸に馬防柵を作り、大量の鉄砲で武田軍を待ち受けたこと。
- ③ 長篠城の背後を突く、徳川軍(酒井忠次)の鷲ヶ巣山砦奇襲作戦が成功したこと。
* 設楽原の武田軍は、思わぬ背後からの鉄砲の音で、退路を断たれたと感じた。前に進むしかない。
* 5月20日に極楽寺(信長本陣)で行われた軍議で、酒井忠次が鷲ヶ巣山砦の奇襲を進言。
信長は諸将の前で一蹴したが、軍議後密かに忠次を呼び決行させた。(敵に漏れることを考慮したため)
- ④ 城を脱出した鳥居強右衛門と鈴木金七郎が、「長篠城」と「設楽原」の情報を伝えることができた。

◆武田勝頼軍はなぜ敗れたのか?

- ① 大将(勝頼)が相手大将と比べ経験が浅い(若い)。
- ② 信長・家康と比べ、鉄砲や火薬の入手が困難。
- ③ 竹田家跡目相続のしこりが残っていた(勝頼 諏訪から)。信玄以来の家臣と勝頼の家臣のズレが生じた。
- ④ 信玄でさえ攻略できなかった高天神城を落とした自信が裏目に出た。



◆新城消防署は一筆啓上の「火の用心」の部分、消防の「火の用心」のアピールに使っている。
 夜回りでの「火の用心」のかけ声は作左の一筆啓上が始まり。「火の用心」の夜回りは、江戸時代初期から。



東郷の戦国史跡の会
 平成三十年戊戌春

「火の用心、お仙泣かすな馬肥やせ」の日本一短い手紙は、ここで書かれたという。

書いたのは、家康家臣の本多作左衛門重次。

書いた時は、天正三年五月十八日頃。

文中の「お仙」は後に越前丸岡城四万石の城主となっている。

「一筆啓上」発信の地

本陣跡→八剣神社

設楽原古戦場
 いろはかるた
 家康が
 本陣ここに
 八剣山
 昭和五十九年四月廿日
 設楽原をまわらふ会
 八剣神社氏子



医王寺

武田勝頼本陣

13:20



歴史探訪コース 医王寺

古井戸



◆武田軍は、進むか撤退か意見が割れた。勝頼は進むことを選び、古参の武田4将は残念だった。代表で山県正景がもう一度勝頼を説得するため、走って医王寺まで来て、井戸で息を整えるために水を一口飲んだ。気持ちを落ち着かせて言上したが駄目だった。

◆山林は近年に植樹されたもの。昔は草山だった。

ヨシ(葦) 別名;アシ

◆イネ科ヨシ属。多年草。葉は(通常は)互生し、長さ20~50cm。幅2~4cm。

医王寺は永正十一(一五一四)年克補契疑大和尚・二世琴室契普大和尚によって創立された曹洞宗のお寺です。
一年を通し、四季折々の花々が咲き乱れ、春にはコブシにモクレン、夏には弁天池に咲き誇るハスが多くの人々の目を惹き寄せ、心を落ち着かせてくれます。秋には弥陀池のほとりのモミジが色づき、参道を染めます。冬にはクワガネモチが赤い実をつけ、白にほんのり紅をさしたサザンカとのコントラストがすばらしく、鳥たちのさえずりがひととき賑やかです。四季を通して訪れる人々の多いお寺です。
天正三(一五七五)年に、織田・徳川連合軍と武田軍の間に起こった『長篠の戦い』では、ここ医王寺に武田勝頼の本陣が置かれました。勝頼は長篠城を攻め、窮地陥った奥平貞昌は徳川家康に救援を要請しました。武田軍と織田・徳川連合軍は設楽原で激突し、連合軍は織田信長の考えによる火縄銃を用いた戦法によって、武田軍に圧勝しました。医王寺には長篠の戦いにまつわる伝説が残っています。決戦前夜のこと、勝頼の枕元に白髪の老人が立ち、「明日の決戦は無謀だ、戦いをやめて故郷に帰りなされ」といさめたところ夢うつつに勝頼はとっさに傍らの太刀をとり、老人の肩口に斬りつけました。老人は煙のように消えましたが、翌朝、弥陀池の久葦がすべて片葉となったというお話です。
弥陀池のほとりには、
「忠言元耳に逆らうひとは反求の深さを要す
片葉千秋の恨み誰が為に 心を尽くす」
と書かれた横山良仙作の漢詩碑がたっています。



参考写真 片葉



阿弥陀池

山門



**医王寺と
武田勝頼本陣跡**
 長篠山 医王寺は永正十一年(一五一四)に創立され、曹洞宗で薬師如来を本尊とし、克補契叟文和尚によって開山され、現在七つの末寺がある。天正三年(一五七五)の長篠の戦の時、武田勝頼がここに本陣をしいた。境内の弥陀が池には、勝頼の設楽原出撃を諫めたアシガ、勝頼の勘気にあつて切りつけられ、片葉になつたという、片葉のアシガが生えている。また長篠の戦の時使用した槍の穂先、矢尻、陣茶釜などが保存され、庫裡には民俗資料を豊富に集めた資料館がある。

本堂



樹齢三百年のクロガネモチ



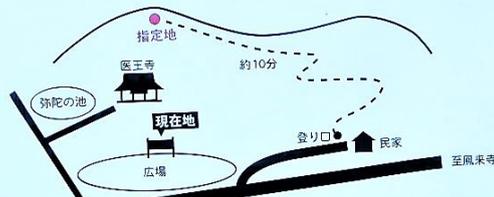
本堂に入りご住職のお話を...



- ◆武田勝頼本陣は長篠の戦いの時に、裏山に陣城と築いたものです。4代住職の時です。「鳳来町誌」によれば、長篠包囲攻撃だけでなく、家康の救援軍を迎撃するための場とも考えていたようです。
- ◆長篠の戦いでは真田一族が討死しています。真田信綱・昌輝兄弟の菩提寺の住職が友人なのですが、毎年こちらにお参りに来ます。2人で話をするのは、負けた方のことばかりです。

なお、ここは、国指定史跡「長篠城跡・市指定史跡「馬場美濃守信房の墓」を南に控え、「鷹ヶ巣岩」跡はじめ武田軍陣地の全部が展望できる位置にあたります。

この医王寺山は、天正三(一五七五)年武田勝頼が長篠城攻略に際し、陣城として使った跡といわれ、広島市立中央図書館、浅野文庫所蔵の諸国古城図のうち、「勝頼陣城」として描かれた絵図と同様な平坦地(曲輪)が今に残っています。



新城市指定文化財

種別・名称
 (史跡) 医王寺山 武田勝頼本陣跡

平成五年七月二三日指定

●所在地
 新城市長篠字墓石五二番地二四
 新城市長篠字墓石七二番地二五

●説明

この医王寺山は、天正三(一五七五)年武田勝頼が長篠城攻略に際し、陣城として使った跡といわれ、広島市立中央図書館、浅野文庫所蔵の諸国古城図のうち、「勝頼陣城」として描かれた絵図と同様な平坦地(曲輪)が今に残っています。

本堂 内陣



達磨大師



位牌堂



右には 大権修利菩薩 (だいげんしゅりぼさつ)



戦国武将の霊牌

鳥居強右衛門勝商
法名：智海常通居士

武田四郎勝頼
法名：景徳院殿頼山勝公大將

馬場美濃守信房
法名：天正庵公大禪定門

◆位牌堂の奥には両軍将兵・武田勝頼・馬場美濃守・鳥居強右衛門も供養されている。

馬場美濃守信春；武田四天王の1人。長篠の戦いで、勝頼を逃がすため殿（しんがり）を務め戦死。

疾如風
掠如火
不动如山
徐如林
侵如山

医王寺資料館

庫裡 2F

合戦・歴史的資料

民俗資料（生活用品など）

奥三河の鉱物や岩石



◆医王寺の境内を日本最長の大断層中央構造線が通っていることから、奥三河の鉱物や岩石が展示されている。 14:05



片葉のヨシが残ってた！

ながしのがっせんいひん
長篠合戦遺品

六十二間筋兜・硯などは、武田軍が残したものと伝えられている。

瓦は、長篠城の野牛門に使用されていたものと伝えられている。

四百四十年間伝来のもので、いずれも明治39年の当山火災をくぐっている。



長篠城

14:14



◆1508年（永正5）、駿河の今川氏親に帰属していた菅沼元成によって築城。桶狭間の戦い後、菅沼貞景の時に徳川についた。宗家・田峯菅沼氏が武田信玄に寝返ると、武田方に攻められ、貞景の子正貞は宗家の説得を容れて武田氏に。信玄が死ぬと家康に攻められ城を捨てて武田領へ。（正貞は内通を疑われ小諸に幽閉・獄死）家康は、奥平貞能の息子 貞昌（信昌）を城主に。武田軍に備え、城は改修・拡張される。

- ◆長篠の戦いは3つあった。
 - ①長篠城の攻防。
 - ②設楽原の合戦。
 - ③鷲ヶ楽山砦（とびがすやまとりで）の奇襲攻撃。

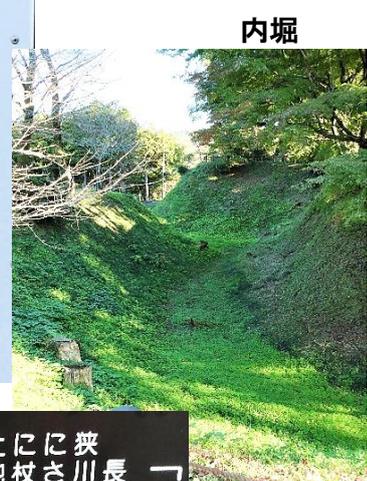
「日本100名城」NO.46「長篠城」

財団法人日本城郭協会 平成 18年 4月 6日 認定

◆後（南側）が堅固な構えの城。本丸は2つの川の合流点を背にする。〔宇連川と寒狭川（豊川）〕 すぐ西側を基石川（すぐ下流で寒狭川に合流する）が流れている。→三方が天然の堀。 北側は平地で守りは弱かったので、しっかりとした堀が掘られている。



地上遺構	
地下遺構	
自然地形	
史跡指定範囲	



対岸・武田軍5つの砦



「さかさ桑」
 長篠の戦いの落武者が、寒狭川の中流にある小松集落にさしかかかって、民家の庭に杖をつきさした。土地の者はその剛力を見てただものではないとおもいその杖に手をふれなかつた。落武者は武田勝頼であつた。杖からは桑の芽が出たが下方に向かつてだけ伸びるので「さかさ桑」と名づけられた。近年それが枯れたので、土地の人がおしみ新しいのをこの土地に植えた。

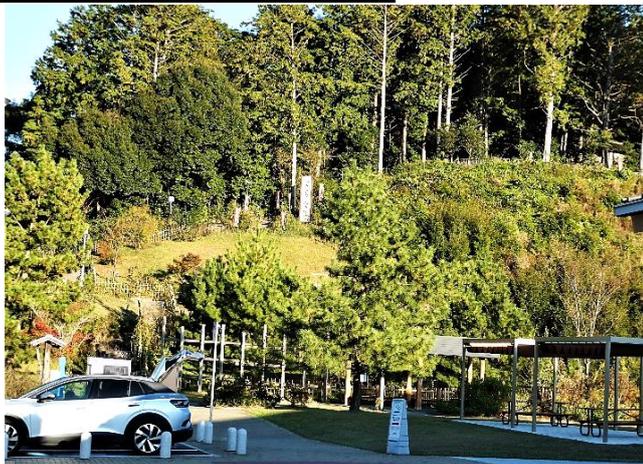
14:55



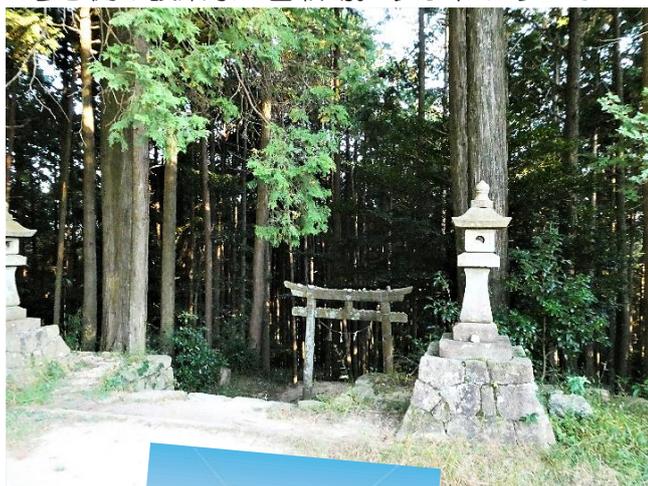
織田信長戦地本陣跡

茶臼山

長篠設楽原PAに隣接



こちら側が設楽原の合戦場。今は木があって...



◆織田信長は、5月18日に設楽原に到着すると、極楽寺で軍議を開き決戦場の布陣を敷いた。信長の戦地本陣は、決戦場の設楽原とは少し離れたの茶臼山。最前線の家康の陣（弾正山）からは1km程離れている。戦況によってはいつでも戦場から離脱できる位置。



無事到着予定。ありがとうございました

16:57



最後の史跡見学終了 満足 😊



17:04



お疲れ様でした。



各ポイントで降車
また来年



入りきらなかった情報は、**資料・写真集** をご覧下さい。